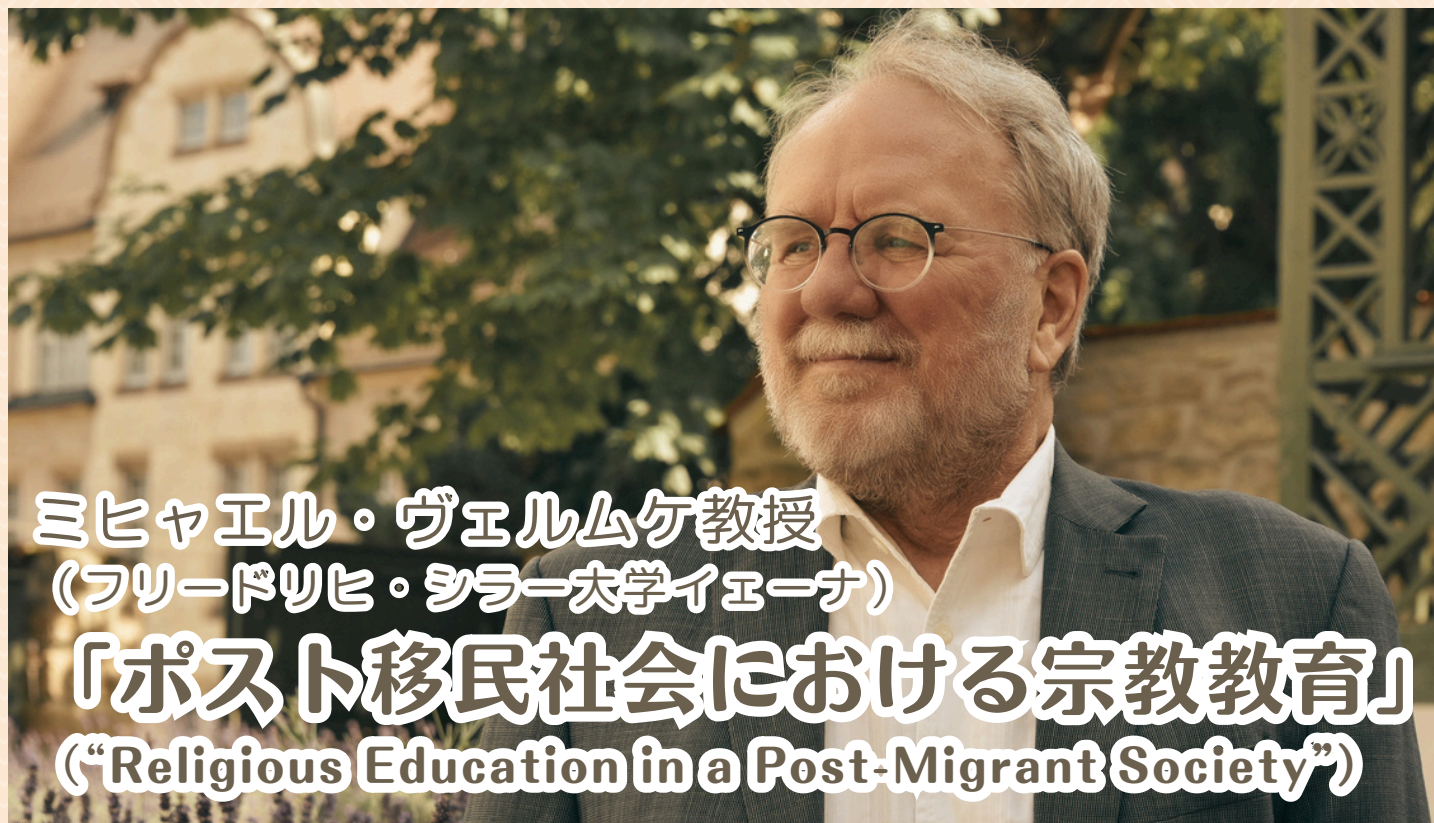




ミヒャエル・ヴェルムケ教授
(フリードリヒ・シラー大学イエーナ)

「ポスト移民社会における宗教教育」 ("Religious Education in a Post-Migrant Society")

本講演では、移民の流入によって国の人口構成だけでなく社会が自らをどのように理解するかまでもが変化する「ポスト移民社会 (post-migrant society)」において、なぜ宗教教育が共生にとって重要なのかを考察する。幼児教育の事例を参考にしつつ、異なる宗教的・イデオロギー的見解との出会いは、多角的な社会が「どのように共生したいか」を模索するより広範なプロセスを反映していると論じる。この観点から、宗教的多元性への対応能力を育むこと、つまり子どもたちが自らの信念について省察しつつ、他の立場に対しても敬意と対話への開放性を持ち接することができるよう支援することが、中心的な目標となる。宗教教育は民主的教育の一部でもあり、子どもをその文化的背景に還元することなく、宗教的世界観を認識できる専門家を必要とする。

(講演、質疑応答は英語で行われます。)

日時

2026年
10月7日(水) 16:40-18:40

会場

大阪大学CiDER(感染症
総合教育研究拠点)
1階セミナー室 105

*参加登録はこちら



(<https://x.gd/gCCAsr>)

Prof. Michael Wermke

(Friedrich-Schiller-Universität
Jena)

…フリードリヒ・シラー大学イエーナ神学部プロテスタント宗教教育学講座教授を務め、現在は同大学の宗教・教育センター (FZRB) 所長および「コミュニティとネットワーク」博士課程プログラム代表、2026年より上級教授。研究関心は宗教に関連する歴史的、体系的、実証的な教育研究。特に、宗教や文化を意識した、すなわち差異に配慮した教育観への取り組みに重点を置いている。